

りんどう

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
葉枯病	—	並	(1) 5月後半の巡回調査では、1圃場で発生が確認された。(±) (2) 6月の降水量はほぼ平年並の予報であり、発生を助長する条件ではない。(±)
ハダニ類	—	並	(1) 5月後半の巡回調査では、発生が確認されなかった。(±) (2) 6月の気温はほぼ平年並の予報であり、発生を助長する条件ではない。(±)
リンドウ ホソハマキ	早	やや少	(1) 県中南部では、5月第3半旬に越冬世代成虫の羽化が例年より早く確認された。 (2) 前年秋期の発生量は、平年より少なかった。(—)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

- リンドウホソハマキ越冬世代成虫の羽化が、県中南部で確認されています。圃場をよく観察し、成虫または潜葉痕や食害痕が認められたら、防除を実施しましょう。
- 褐斑病は、昨年秋期の発生が多く、本年も発生が懸念されるので、重点防除時期には効果の高い薬剤で確実に防除を行いましょう。

【葉枯病】

- (1) 薬剤散布は10～15日間隔で行う。前年発生の多かった圃場や、下葉を観察して発生が見られる場合は、10日間隔で予防散布を行い上位葉への感染を防ぐ。
- (2) 降雨が続く場合は、散布間隔を狭め、週間天気予報を参考にして降雨前の散布を心掛ける。
- (3) 感受性に品種間差が見られ、エゾ系で高く、ササ系で低い。
- (4) 定植初年株は特に感受性が高いので、防除を徹底する。
- (5) 弱小茎や、こぼれ種から生じた茎葉は、早くから発病しやすいため、折り取り処分する。

【褐斑病】

- (1) 6月下旬～7月中下旬にかけて一次感染し、2～3週間の潜伏を経て7月下旬～8月上旬頃に初発がみられる。重点防除時期である6月下旬～7月下旬に効果の高い薬剤を散布する。
- (2) 株仕立てが不十分であったり、風通しの悪い圃場では発生が多くなるため、適正な茎数に管理する。
- (3) 北側などの日当たりの悪い場所や、下位葉及び畦の内部で発生が多く見られることから、薬液が株全体にかかるよう散布する。

【ハダニ類】

- (1) 体色が赤色のカンザワハダニと半透明のナミハダニが寄生するが、後者は特に見落としやすいので注意して観察する。
- (2) 雑草はハダニ類の発生源となるので、除草し圃場外へ運び出す。
- (3) 多発してからでは防除が困難となるので、前年多発圃場や常発圃場では下位葉の葉裏を観察し、発生初期に十分量を散布する。
- (4) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

【リンドウホソハマキ】

- (1) 重点防除対象は第1世代の卵、幼虫であるため、圃場をよく観察し、成虫（図1）または潜葉痕や食害痕（図2、3）が認められたら薬剤を散布する。
- (2) フェニックス顆粒水和剤およびディアナSCは、潜葉痕や生長部の食害が初確認された時期と、その10日後の2回散布すると効果が高い（平成26年度試験研究成果、平成30年度病害虫防除技術情報30-5参照）。
- (3) アディオフロアブルの効果低下事例が認められているので、前年、アディオフロアブルを使用しても被害が目立った圃場では、前記（2）に示した薬剤によって防除する。
- (4) 産卵の大部分は葉裏に行われるため、下位葉の葉裏までしっかり薬剤がかかるよう、丁寧に散布する。
- (5) 茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、生長部の被害（図4）を見つけたら折り取り、土中に埋めるなどして処分する。



図1 成虫



図2 潜葉痕

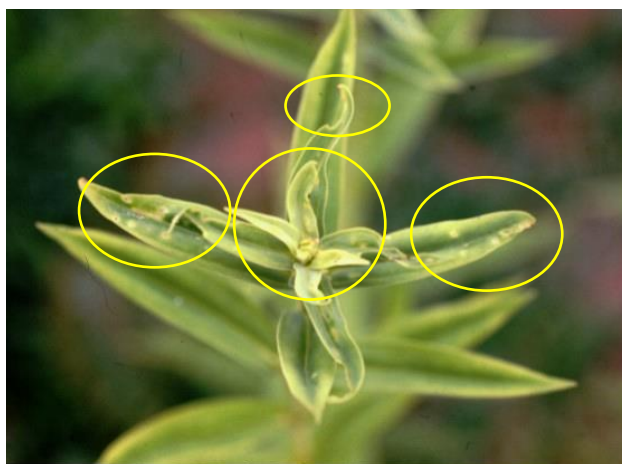


図3 生長部の初期の食害痕



図4 生長部の被害